

活 用 法 超 時 間 童 門 式

童門冬二

童
門
式

超
時
間

活
用
法

どうもんしき ちよう じ かん かつ よう ほう
童門式「超」時間活用法

定価はカバーに表示してあります。

1997年2月25日印刷

1997年3月7日発行

著 者 どうもんふゆ じ
童門冬二

発行者 嶋中鵬二

発行所 中央公論社 〒104 東京都中央区京橋2-8-7

TEL 03-3563-1431(販売部) 03-3563-3664(編集部) 振替 00120-4-34

©1997 CHUOKORON-SHA, INC. / Fuyuji Domon

本文・カバー印刷 三晃印刷

用紙 三菱製紙 製本 小泉製本

ISBN4-12-002642-6 C0295

Printed in Japan

乱丁本・落丁本は小社販売部宛お送り下さい。

送料小社負担にてお取り替えいたします。

目次

ある大型新人作家のわたしへの疑問

9

私の文章作成法

14

原稿ができるまでのプロセス

14

ヒントは映画に

17

頭脳の発酵作用

24

細井平洲の教訓

30

古典落語の話法で歴史を語る

32

積小為大

37

映像的な発想をとり入れる

41

歴史史（資）料の扱い方

50

自家製の新しい史（資）料をつくる

50

勤め先で学んだやさしい文章の書き方

56

丹羽文雄先生の「小説作法」に学ぶ

64

時間の短縮と活用

67

睡眠時間についての工夫

71

一日二十四時間を自由に使う

71

旅先は読書と睡眠の時間

75

失われた睡眠時間を求めるな

77

酒の付き合いは一次会まで

81

二宮金次郎の「天の理に反する人間の理」

86

発想の転換が時間革命を生む

92

深夜は映画とビデオの時間

98

さまざまな時間活用法

103

打ち合わせは午前中に

103

ファックスが好き

111

どうにもならない時間の存在

114

精神のギアチェンジ

124

新幹線の場合

130

頭の中の浄化作用

135

わたしがなぜ映画を愛するか

139

酒、ビール、ウィスキー、併行飲酒のすすめ

143

名君、細川重賢の人づくり

ガス抜きと映画の観溜め

二人だけの桜桃忌

情報処理と新しい情報仕込みの場

自分だけの三疊間

食事をしながら情報を仕込む

大切な地方からの情報の風

情報仕込みのノウハウ

現代の臨海開発

徳川家康の臨海開発

徳川義直の理想郷

江戸から続いている地域特性の創造と確立

映画批評と大河歴史ドラマの随想

食い物における時間の短縮

自分にやさしくするための時間活用法

わたし自身の生き方

心の中で勤め続けている都庁

時間の管理はわたし自身の自己変革の方法

わたしにおける時間管理法

童門式「超」時間活用法

ある大型新人作家のわたしへの疑問

その頃の私は、小説など一行も書き出していなかったのに「いつか作家になるんだ」と思い込んでいて、お目にかかる機会にかこつけ、童門冬二という作家が作品を作り出す過程を、根掘り葉掘り聞き出そうとしていた。小説作法を企業秘密とするならば、まさしく不埒な産業スパイである。

愚かなスパイが聞き込んだ童門さんのデータは、およそ次のようなものであった。

○週のうち三日、あるいはそれ以上、全国各地で講演している。(月十五回から二十回)。

○新作映画のほとんどを、オールナイトかロードショーでみている。

○少なくとも本数のムービー・ビデオをみている。

○少なくとも回数テレビ・ラジオ出演。

○枕元には未読の本が積んであり、夜毎、順ぐりに消化する。

○連載が二十本、書き下ろしが常時多数、同時進行。

後から小耳に挟んだところによれば、このほかに、

○カラオケ（！）にも時間を割く。

ここで私は、謎の壁にぶつかった。創作に充てる時間を、いったいどこから捻出なさるのだろうか。

「いつ筆をお執りになるのですか」

「僕は午前中だけです」

「とはいえ、これだけの本数ですよ」

「早くに起床しますから」

「そうはいつでも、限度が……」

「午前四時か、五時には起きてます」

「でも、お寝みになるのが晩いんでしょう？ 読書なさってからと伺いました。とすると、

睡眠時間は——」

「ある頃からですが、人間は寝なくても何とかなる、と思えてきたんです」

「謎は深まるばかりであった。私は納得しなかった。限られた時間で、スムーズに創作を行うためには、システマティックな「方法」が必ず存在するはずだ。この謎を解くべく、さらなる情報を収集するためには、標的の心臓部に近づくのが早道であるのだが――」。

童門さんの当時のユニットをご自身は「童門工房」と呼んでいらした。この童門工房に、スタッフとして潜入することができたなら、おそらく私は、オフィスのあらゆるキャビネットを開け、抽斗という抽斗を探り、ファイルのなかをのぞき――驚くべき執筆ノウハウを発見することができたかもしれない。

残念ながら（童門さんはさぞかし、ホッとされていることだろう）、そのチャンスはやってこなかった。

右の文章は、わたしにすれば相当にテレくさい。

『龍の契り』（祥伝社）で彗星のごとく出現し、「〇十年に一度の大型新人」の名をほしいままにした服部真澄さんが書いたものである（呼称など、ぼくが勝手に変えた）。

服部さんはひきつづき『驚の驕り』（祥伝社）を書いて大型ぶりをいよいよ発揮しているが、十年ちかく前には編集者だった。わたしに連載評伝の場をくれて、時折話をした。

それが縁で、わたしの『江戸のビジネス感覚』（朝日文芸文庫）の解説文に、右のような文章を寄せてくれたのだ。

服部さんが提供したわたしへのこの種の疑問はかなり普遍化し、おおげさにいえば、会う人ごとに同じことをきかれる。

そこで、果して企業秘密になるのかどうかはわからないが、いまわたしがやっている仕事の処理方法を、あけすけに公開して、この種の疑問におこたえしたい。

仕事の処理方法といっても結局疑問の核（コア）は、

「いつ書くのか？」

「いつ映画を観るのか？」

「いつ眠るのか？」

という、“いつ”に絞りこまれる気がする。となると、この“工程公開”は、わたしにおける時間の使い方、即ちわたしの、

「超時間管理法」

ということになる。読まれた方から、

「それが人間の生活か？」

というヒンシュクを買うのを十二分に承知のうえで、あえて、

「恥の多い毎日」
を吐露する。それはもう一人のわたしへの、
痛苦にみちたザンゲであり、ゆるしを求め
る営みでもある。

私の文章作成法

原稿ができるまでのプロセス

時間は時計によって規制されている。そして一日二十四時間しかない。これはだれにでも公平平等に与えられた“時”の総量だ。それを活用するとは、仕事でいえば、まず、

- 1 仕事に必要とする時間そのものを短縮する。

- 2 複数の仕事を同時におこなう。

などということが考えられる。1の場合は個人差があるのでいちがいにいえないが、2の場合はいろいろなくふうが可能になる。

たとえば手っ取り早い例として、この本を書いた時のことをあげよう。

わたしは原稿を書く時に、テープレコーダーとワードプロセッサを連結させている。そして、テープレコーダーはわたし、ワープロはわたし以外の人、という方法を実行し